

思いの受け止め、そして、役割分担

～かけがえのない「命」を預かる学校～



水戸教育事務所生徒指導班では、複雑化・多様化する児童生徒をめぐる様々な課題に対応しようと、学校訪問をしたり、相談への対応をしたり、不登校状況を把握したりしながら助言指導を行っています。その中で感じることは、関わる人たちとのコミュニケーションの難しさです。ここでは、関わってきた事例から思うことをまとめました。

<現状>

(1) コミュニケーションツールは発達・進化しているが、うまくコミュニケーションがとれない。

子供や保護者の反応は、教師自身の言葉や行為行動を映す鏡であることを自覚し、私たちは、日常の言葉かけや関わりが、子供や保護者にどう受け止められているかを考える必要がある。思うような反応を期待する前に「自分が伝えなかったように伝わっているか。」を確認する。

(2) 思いやり・他者意識が育っていないこともある。

子供が、感情や思いを言葉にして表現することは、相互理解の出発点となるものである。

私たちは、道徳的な枠組みの共有化を図り、生活するためのルール of 明確化と一貫性、そして共通理解を図っていく必要がある。

伝わったかな



1 事例から学ぶ教師の心構え

(1) 児童生徒や保護者の行為行動から、思いや感情、メッセージを読み取る。

(例) 生活経験において、身に付けてないことや満たされない思いがある。

不安や恐怖などの不快感情 ⇒ 感情に寄り添う＝言語化し伝えること

(2) ていねいに、根気強く対応していく。

根気強く対応することは、児童生徒の思いを受け止めることと同時に、児童生徒のニーズに応じることになる。

(3) 学校と保護者に、考え方の違いがあることを念頭に入れておく。

<学 校> = 「子供は失敗することが当たり前、失敗して成長する。」

「どうにもならないことを訴えてくるが、できないと言にくい。」

「白・黒を求められるが……割り切れないこともある。」

<保護者> = 「うまくいくことが当たり前。失敗させないのが学校だ。」

「失敗や間違いをさせ、子どもも傷つくのは許せない。」

2 配慮すること

(1) 学校は、保護者の行為行動で表出している思いを聞き取る。その思いに応じていく。

(2) 子供への支援においては、保護者と学校が話し合い、役割を明確にし、それぞれの役割を遂行していく。その際、学校は保護者が役割を遂行できるよう支援していく。

言葉ワンポイント「甘え」と「ゆるし」

親子において、「甘えさせる」というと「甘やかす」と思われがちですが、この2つは似ているようで全く違います。「甘やかす」とは、子供が自分でできることを親が先回りしてやってしまうこと。親自体が、自分の都合や感情により動くことで、子供の主体性が育まれず依存心が強まったり、子供が不快な思いを安全に受け止められないことで、自分の思いを表現する思春期には、非社会・反社会的行動が見られたりすることがある。結果、「怒り」として様々な行為行動により表出されると考えます。

「甘えさせる」とは、子供が親の助けや愛情を求めてきた時に、その気持ちを理解し、認めてあげること。そのような関わりを通して健全な自主性、自律性、自己抑制力が獲得されていき、心の中に不快な思いを安全な思いとして落とし込めるようになる。結果、他者を「ゆるす」ことにつながっていくと考えています。

自分の心の動きに素直になる。
「勘」や「違和感」を大切に。
○「おかしいな、いつもと違うな」と感じたことは、口に出す。
○「心配」「不安」等を感じたら行動に移す。
●「何もなかったがOKなこと」。
●「生徒や保護者が「もう結構です」と言うまで動く」。